

〔東雅天文〕霧キリキリといふも亦暗の義なり、舊説にキリとは、クロの轉語也と云へり、キハク

にして、リハラロ等の同韻なるをいふなり、日向國風土記に、昔天孫の尊、此國高千穂二上之峯に天降給ひし時に、天

暗冥にして晝夜を別たす、その土蜘蛛二人が教のまゝに、稻千穂をぬきて、粃となして投散し給

ひしかば、天開晴を得たり、これに因りて高千穂二上の峯といふよしをえり、其峯は即今霧

島が嶽といふものにて、延喜式に見えし霧島神社、猶今も其峯の西にあるなり、さらば舊説の如

き其義相合へり、と見えたり、霞讀てマギルといふ也、またこれ目昏の義なり

〔倭訓前編七〕きり 霧はいきるの義也、鬱蒸の氣をいふ、万葉集に白氣もよみ、春日の霧流と見

えたり、朝ぎり、夕ぎり、八重ぎり、天津ぎり、夏ぎり、夜ぎり、天のさぎり、山ぎり、うき霧はつぎり、薄ぎ

り、川ぎりなどよめり、秋をもと、して四時にわたりて歌にもあり、霧の浮浪、霧の海霧の離など

は、皆見たてたる詞也、七夕に霧の戸ばりとよめるも同じ、詩にも霧幕など作れり、

〔八雲御抄天象〕霧 あさ 夕 うす 秋 あま 川 山 あまつ 万に夜霧とよめり ほの

ゆける霞の名也○一 万にゆふべにたちてあしたにうすと讀り、後撰に秋ぎりのあたる本不記細註

云 あまのさぎり日本紀 万にはる山の霧にまどへるうぐひすと云、詩にも作也、万あしのは

にゆふぎりたちて、万にたなびくとよめり、霧は病名也、仍得心詠べし、又なげきの霧ともい

へり、いさらなみ是は霧名也 夏霧在万葉 秋ぎりにぬるとは、秋ぎりにぬれし衣をほさずしてと、

古歌にあり、

〔塵袋〕一蒙霧ト云フ、ハ、キリヲカウブルグラキキリ歟、

打任テハクラキ心蒙昧ナド云フ同ジテイノ事歟、但シ甘泉賦ニ霧集テ而蒙合ト云ヘリ、注ニ霧

ヲバ地氣ト釋シ、蒙ヲバ天氣ト云ヘリ、サレバ蒙ハ天ヨリブルキリ、霧は地ヨリタツキリナルベ

シ、是ハツチノ心ニハタガヒタルニヤ、